
——御台場女学校、校舎にて。

「初っ！」

「慥……」

「どうしたのっ！　すごく顔色が悪いわ！」

「純とね、さっきまで一緒にご飯を」

「まさか、またあの辛いラーメンへ行ってたのっ！」

「……あの子が、また行きたいって」

「初は辛いのが苦手でしょ！　どうしてそんな無茶するの！」

「だって、」

「あの子が、あんなにうれしそうに誘うんだもの。」

「それを断れるはず。」

「……いいえ。」

「一緒に行かないわけじゃないでしょ？」

「だったら、せめて辛くないやつ頼めばいいじゃないっ！」

「制服が白いから、染みがつくから赤いの無理とか言えばいいのに！」

「簡単な解決でしょ！」

「……でも。」

「あの子が、一緒のがいいって」

「……ね？」

「わかるでしょ？」

「っ！」

「慥っ！　どこへいくつもり！」

「もちろん、純のどこ！　いつともいつとも初にばかり大変な思いさせて、慥が代わりに文句言ってくる！」

「……待ちなさい」

「初っ、手を！」

「だめ」

「……知ってるでしょ？」

「私が、それを隠してるって。」

「でも……」

「だって、それじゃあ……いつまでも初が。」

「わかって」

「わたしは、大丈夫、だから。ね？」

「……。初がそこまで言うなら」

「……わかりました。
でも、

「僅にできることがあったら、いつでも相談にのるから」
僅にできることだったら、なんだっていいわよ。
初のお願いだったら、僅はなんでもきいてあげる！

「……。『なんでも』？」

「ええ。なんでも！」

「……本当に？」

「ほ、ほんとう、よ」
でも、

……初、どうしたの？

どうして、僅の持つてるCHARMを見てるの？

……初？

「貴女のそれ」

初が指さしてるのは、僅のCHARM。

新しく作ってもらったユニーク機。

「あ、うん。さっきまで練習してたのよ」

第3世代先行試作機、グランシーザ。

複雑な変形、合体機構がついてる、実戦だとまだ、僅く
らいしか扱えないような難しいCHARMだ。

それでもまだ、この子の性能を完全に引き出せたとは思
っていない。

手先の器用さには自信があったけれど、この子の扱いに

はまだ全然足りていない。

だから、さっきまでずっと自主練をしていたのだけど。

「それを持って、着いてきて」

「初？」

『『なんでも』。言うこときいてくれるんでしょ？』

「う、うん！ もちろん」

「それなら、」

ね。僅？

……賢い貴女なら、もうわかってるでしょ？

私のお願いが「なに」か、なんて。

その言葉と、初の冷めたような目に。

僅は自分の喉が鳴ったのを自覚した。

慥が初に連れられてやって来たのは御台場にある砂浜だった。

遠くに橋を臨める開けた空の下。

周りに人の気配はない。

ここはまだガーデンの敷地内で、もう午後の授業は始まっているから。

そこで、

「……初、なんでこんなこと慥にするの？」

「……」

初は何も応えてくれない。

冷めた眼差しのまま、その手に持っているのは慥のCHARM。グランシーザの変形機構のひとつ、マジを使ったワイヤー。

「っ！」

「……」

CHARMにマジを供給しているのは慥自身。そしてそのワイヤーを手繰って、慥自身を縛り上げているのは、初だった。

つまり、慥はいま、自分自身で起動したCHARMを使わせて、初に自分自身を縛らせている。

その行為を、受け入れている。

こんなのは、変だ。

そう思うけど、言っても初は何も応えてくれない。いつもみたいに。

「……初、痛い」

「……」

返事の代わりに、慥の声に反応するように無感情だった初の頬に紅がさした。

口元が、ゆるんだ。

恍惚の表情が、浮かんだ。

そして、これ以上きつく縛ると痣になつて残るくらいのギリギリのところで、初は手を止めてくれた。

「慥」

わかってるわね。

勝手に停止したら、ダメよ。

冷めた口調。冷めた目つき。

普段の優しい初じゃない。

だけど、これも『いつもの初』だ。

「初……」

自分が初にされていること、受け入れてしまっていることは、絶対、変なことだ。

わかってる。

……でも、なんでもするって言った。
言ってしまった。
だから、やってる。
だけど……。

「初……」
自分でもわかるくらい、泣きそうな声が出てる。
だって、こんなの変。絶対、おかしい。
誰かに見られたらって思ったら、それだけで怖い。
そんな槿の声と表情に初は、喜悦の表情を浮かべる。
喜んでる。

初が、喜んでる。

「あ、槿はっ」

初を、初のこと、

「信じてるから」

槿自身、全然説得力のないか細い言葉だと思った。
でも、ほんとうのことよ。

槿は、初のことを信じてるから。

「槿は、いつでも初の味方よ」

だから、もう、

「やめよう」
ね？

槿、初のお願いきいたから。
初も喜んだでしょ？
だから。

初の口元がつり上がった。

そうして、初がようやく発した言葉は、

「まだよ」

槿の望むものではなかった。

ぞくり槿の背筋を悪寒が走った。

「……そうね、どうしようかしら」

言いながら初が取り出したのは携帯端末だ。

それを操作しながら、

「純が、」

「っ！」

槿のこんな姿見たら、どう思うでしょうね？

そ、そんなの、そんなの、

「くく♪」

うれしそうな初が携帯端末を槿に向け、

カシャ

シャッター音。

……え、いま、撮ったの？

……初？

「初っ!？」

「……だめよ」

まだ、動いちゃ。

そう言いながら、初は携帯端末に指を滑らせる。

そうしながら、

「もし、」

そう、もし。

私が今ちよつと操作を間違えて、ガーデンの連絡網にい

まの写真、送ってしまったら？

身体にざわつきが走る。

い、イヤ。

そんなこと、されたら……。

カシヤ

再びのシャッター音。

また、撮られた。

「慥は、初のこと」

信じてる。

そんなこと、初はしないって。

こんなのは、ただの遊びだって。

わかってる。

けど、

「……初」

カシヤ

カシヤ

カシヤ

そんな慥の写真を初は何枚も撮っていく。

何枚も、何枚も。

うれしそうに、楽しそうに。

目は全然笑ってないけど。

冷たいままだけど。

初は、いま、喜んでる。

慥が、痛くなってるのを。怖がつてるのを。

初は、喜んでくれてる。

こんなの変だけど、これが『いつもの初』だ。

慥が知ってる、もうひとりの初だ。

慥に優しくはしてくれないけど、慥を見てくれている初。

純じゃなくて、慥を見てくれてる。

慥にずっと向いててくれてる。

だから、言われるままにする。

言われるがままにポーズをとる。

恥ずかしかったけど、ピースとかもした。

気持ちはぜんぜんピースとかじゃない。

泣きそうだった。

でも、慥はこんなことじゃ泣かない。
大好きな初が喜んでるから、耐えてる。

泣きそうだけど、耐えてるの。

怖いけど、耐えてるの。

「ねえ、慥」

「っ」

初の声が、耳元でささやく。

「もしこんな写真、誰かが見たら」

そう、例えば、いつも貴女が叱りつけてる下級生たち。

あの子たちが見たら、どう思うんでしょうね？

「慥は、初のこと」

「そればかりね」

……でも、

カシャ

「いまのは、とてもいい表情だったわ」

そうやって端末の画面を慥に見せてくる。

……え。

そこに写ってるのは慥だ。

いま撮られたばかりの慥だ。

泣きそうで、怖がつてる、慥だ。

でも、

「貴女、こんないい顔してるのよ？」

知ってた？

うそだ。

うそだ。

うそだうそだうそだ！

慥は、いま泣きそうなんだ。怖いんだ。我慢して耐えてるんだ。

なのに、どうして。

どうして、慥はそんな顔してるの？

どうしてそんなにうれしそうなの？

初じゃなくて、慥が。

どうして、そんな顔……。

カシャ

「ほら、また撮れた」

初が見せてくる。

どうしてだろう。さっきよりもっと喜んでる。

喜んでる慥がいる。

「これだけじゃないのよ」

ほら、と。

慥の目の前で、さっきまで撮ってた写真を初が指先でめ

くっっていく。

どの権も、泣いてない。

どの権も、怖がつてない。

どの権も、耐えてない。

どの権も、喜んでる。

うれしそうに、よろこんでる。

うれしそうに、ピースしてる。

「そう、その表情」

カシヤ

初がまた写真を撮る。

そこにもたぶん写ってる、さっきよりもっとうれしそう
な顔の権が。

強ばった口元は、笑みを堪えていて。

ぞくぞくしてた恐怖が、快感になってる。

「〜♪」

初は喜んでる。

そして、権も。

いまの状況を喜んでる。

いまの状況を楽しんでる。

権は、権は、

「権ってやっぱり、」

ヘンタイ、ね。

放心状態の権に向けた初の声は普段に戻ってて。

瞳にもあったかさが戻っていて。

権だけが、いま、恍惚の顔のまま、ただ、海辺に座って
いる。

それを初は優しい眼差しで見つめている。

権の大好きな、優しい初の眼差しだ。

だから、権は、いま。

とってもうれしいんだ。
